

### その場の空気に向けてはならない

山本七平(「日本人とユダヤ人」他、著書多数、故人)は、自らの著書「空気の研究」の中で、日本の社会では、あらゆる議論が、最後にはその場の「空気」によって決定されることが多い。「空気」がその場のすべてを統制し、各人の口を封じてしまう。それは、戦前も戦後も変りはない。したがって、日本の社会に一番必要なのは、「水を差す」行為であると述べています。

三千もの将兵が乗り組んだ戦艦大和は、戦闘機の護衛なしで沖縄に向けて出撃し、途中、米機動部隊の攻撃によって沈められました。戦艦大和の出撃は、サイパン陥落時にも検討されたのですが、無傷(機関、水圧、電力など)で到達できなければ、主砲の射撃ができない、などの理由で取り止めになったのだそうです。しかし沖縄では、「敵機動部隊が跳梁(=わがもの鱓のさばる)する外海への突入は作戦にならない、それは明白な事実である」との主張も、サイパン時にはなかった「空気」によって退けられ、海も船も空も知り尽くし、尚かつ、米軍の実力を熟知している海軍軍人が、素人でもやらない無謀な決断をしてしまったということです。

戦後、この作戦を追求する声に、「当時はああせざるを得なかった」と、根拠は専らあの時の「空気」だけだった。太平洋戦争も、実は「空気」で決まり始まった。したがって、「水を差す」行為は重要で、戦争の前に、「そう言ったって石油がないじゃないか」と新聞が一言でも書けば、「空気」も瞬時に崩れたかもしれない、とも述べています。

戦後の日本には、愛国心が戦争を引き起こしたかのような認識をしている人もいますが、愛国心を戦争に向けさせ、利用したのであって、愛国心に責任はないと思います。意見を自由に述べられる環境と、その場の「空気」を吹き払う勇氣と信念が人々に必要だったのでしょう。当然のことながら、「空気」にも責任がないのは明らかです。

各種の研究会や会議で、その場の「空気」に発言できなかったこともあるのではないかと思います。私達は、こういった「空気」の呪縛を打ち破れるようにならなければなりませんし、また、そのような人間を育てていくことが大切です。前の大戦のような破滅への道を歩まぬためにも、健全な社会の建設のためにも。

### 教師が敬われる学校

「三尺下がって師の影を踏まず」などという教師と生徒の関係が、この日本にあったことなど、とても信じられないような状況になっている学校も少なくはないでしょう。生徒が教師を敬い、精一杯努力する姿が失われつつある現状を危惧し、立派な教育など望めそうになり、との指摘を耳にしたことがあります。そんな状況の学校では全くその通りと思います。

内外教育に、次のようなことが紹介されていました。中国の甘肅省の学校を訪問した時、街角に、「慶祝教師節」と大書された旗が林立し、砂漠をわたる風にはためいていた。訪問校の校長の説明では、「文化大革命中は知識人を排斥し、教師を冷遇したが、教師を尊敬しない生徒を指導しても効果は乏しい。そのため学校は荒廃し、国の発展は阻害された。その反省から、教師を尊敬する社会を回復させよう」と教師の日が設けられたと。

生徒が教師を尊敬しないのは、尊敬されるような教師がないから、で片づけられない問題があるように思います。教師と生徒が信頼関係で結ばれ、誰もが夢や希望に向かって生き生きとしているような学校であれば、旗はなくても大丈夫と思っています。

### 教育に必要な確信

こんなことをやっても無駄だし無意味、と感じながら教育活動をして、何の成果も上がらない。教育界には、このような思いで教育活動をする教職員も少なくはない、と私は考えています。例えば、自動車会社で、製造に係わった従業員がこき下ろすような車が売れるはずはありません。同様に、教職に身を置く人間が、無意味と感じる教育活動で成果を上げることなどできません。

これならば絶対に生徒が育つ、学校が良くなる、といった確信がもてるようなら、間違いなく成果が上がると思います。

### 「優秀な子どもにしよう」と思うな

保護者にこのような話を何度かした覚えがあります。「子どもが親より優れていると思わないこと、とにかく子どもは親以下である」、「<sup>とんひ</sup>鷹が鷹を生むことはない」、「大市民でなくていい、小市民で十分ではないか」、「自分の子は、誠実に生きて、わずかながらでも皆さんのお役に立てる人間になれば」と考えれば、親の気負いはなくなるし、子どもは負担にならないと。

高い目標を定め、それに向かうよう<sup>しった</sup>叱咤激励すれば子どもはつらくなる。テストで80点を取ったら賞賛に値するのに、「何だ満点じゃないのか」とでも言ったら、もう話す気にもなれない。「立派だね」と誉めてやれば、また頑張ろうとの気持ちにもなる。学校での意欲的ではつらつとした子どもの姿は、やがて自慢の子どもにも思えてくるでしょう。

剣道の試合を見に来た父親が、子どもを殴っていたのを見たことがある。素人の父親なら、殴られることもなかったでしょう。素人なら微妙なところが分からないので、責めるようなことは言わないし言えない。だからのびのびできるという面がある。この子どもは、父親にはもう来てほしくないと思ったことでしょう。

昔から、「子どもに過剰な期待をするな」、「夢を託すようなことはするな」と言われていますが、親が敷いたレールの上を、子どもに走らせてはいけません。

### やり甲斐がある

校長職を終着駅と考える人が世の中にはいますが、教職員の中に、あるいは、校長自身にそんな認識があってはならないと思います。校長職は終わりではなく始まりです。私は、かなり若い頃から早く校長にならなければと考えていました。発言権を手にして、現場の思いを積極的に発言しなければ、世の中何も変わらないと感じていたからです。

命も要らぬ、名も要らぬ、金も地位も何も要らぬという人間ほど始末におえぬものはない、と西郷隆盛に言わしめた山岡鉄舟の交渉の相手が、西郷という希代の英雄だったからこそ、江戸無血開城ができたのだと思います。決死の覚悟で駿河に向い、誠心誠意、捨て身の鉄舟の姿に西郷の心が響いたのでしょう。鉄舟の気概、西郷の度量は大いに見習いたいことです。

残り何年もない歳でしか校長になれないので、時間切れ、手遅れにならないかという思いもありましたが、考えていたことの多くは実行できました。本校でも十分できると考えています。今までの教職経験、人生経験はこの時のためにあったと感じています。先生方には、管理職になる気はないなどと言わないで目指してほしいと思います。